

史跡・名勝 嵐山

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一二―二三

史跡・名勝 嵐山

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

史跡・名勝 嵐山

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、商業施設建築に伴う史跡・名勝 嵐山の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

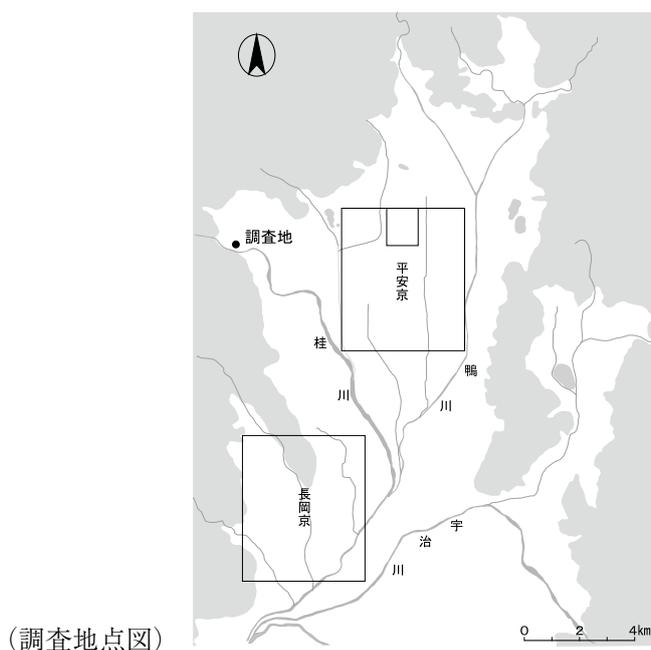
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成25年5月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 史跡・名勝 嵐山
- 2 調査所在地 京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町40-8, 9, 13, 15, 30, 47, 49
- 3 委 託 者 株式会社西利 代表取締役会長 平井義久
- 4 調査期間 2013年1月7日～2013年3月26日
- 5 調査面積 686㎡
- 6 調査担当者 布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「大覚寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 布川豊治
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	6
(1) 遺構の概要	6
(2) 層 序	6
(3) 遺 構	6
4. 遺 物	16
(1) 遺物の概要	16
(2) 土器類	16
(3) その他の遺物	17
5. ま と め	19

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（北から）
		2	2区全景（西から）
		3	3区全景（北から）
		4	4区全景（東から）
図版2	遺構	1	5区全景（南西から）
		2	6区全景（西から）
図版3	遺構	1	7区全景（北から）
		2	8区全景（西から）
		3	9区全景（北から）
図版4	遺構	1	10区全景（北から）
		2	建物10（西から）
		3	溝47・柱穴列161（北から）
		4	土坑70・93（東から）
図版5	遺物		出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（東から）	2
図4	調査風景（北西から）	2
図5	遺構検出状況（西から）	2
図6	遺構保存作業（南西から）	2
図7	調査区断面図1（1：100）	7
図8	調査区断面図2（1：100）	8
図9	遺構平面図（室町時代後期、1：200）	9
図10	遺構平面図（江戸時代以降、1：200）	10
図11	建物10平面図（1：50）	11
図12	石列・柱穴列・柱穴平面図（1：50）	12
図13	土坑143平面図（1：50）	13
図14	柱穴列156平面図（1：50）	14
図15	溝47・柱穴列161実測図（1：50）	14
図16	土坑70・93平面図（1：50）	15
図17	土器実測図（1：4）	17
図18	瓦類拓影・実測図（1：4、18のみ1：2）	18
図19	石臼拓影・実測図（1：4）	18

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	16

史跡・名勝 嵐山

1. 調査経過

調査地は史跡・名勝嵐山指定地内の天龍寺南側の、道路を挟んだ京福電鉄嵐山駅の西側に位置する（図1）。ここに商業施設を建築する計画が立案され、それに先立って埋蔵文化財調査を実施することになった。調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当した。当初、調査区は下水道管を埋設する予定範囲に4箇所設定した。それらは幅2m、長さ16～38.5mで、調査地の外周を四角く囲む形になる（図2）。西側を1区、南側を2区、東側を3区、北側を4区とした。調査面積は約207㎡である。調査の結果、遺構の残存状態が良好であることが判明し、追加調査を実施することになった。3・4区に隣接する敷地中央部に南北5.4～5.6m、東西約30.4mの5区と、2・3区に隣接する南北約5.6m、東西約25mの6区を設定した。調査面積は318㎡である。さらに、1・2・5・6区の間に7区、5区の南隣に8区、3区の東隣に9・10区を設定した。7～10区の調査面積は約161㎡である。最終的な調査区は、中央に長辺約

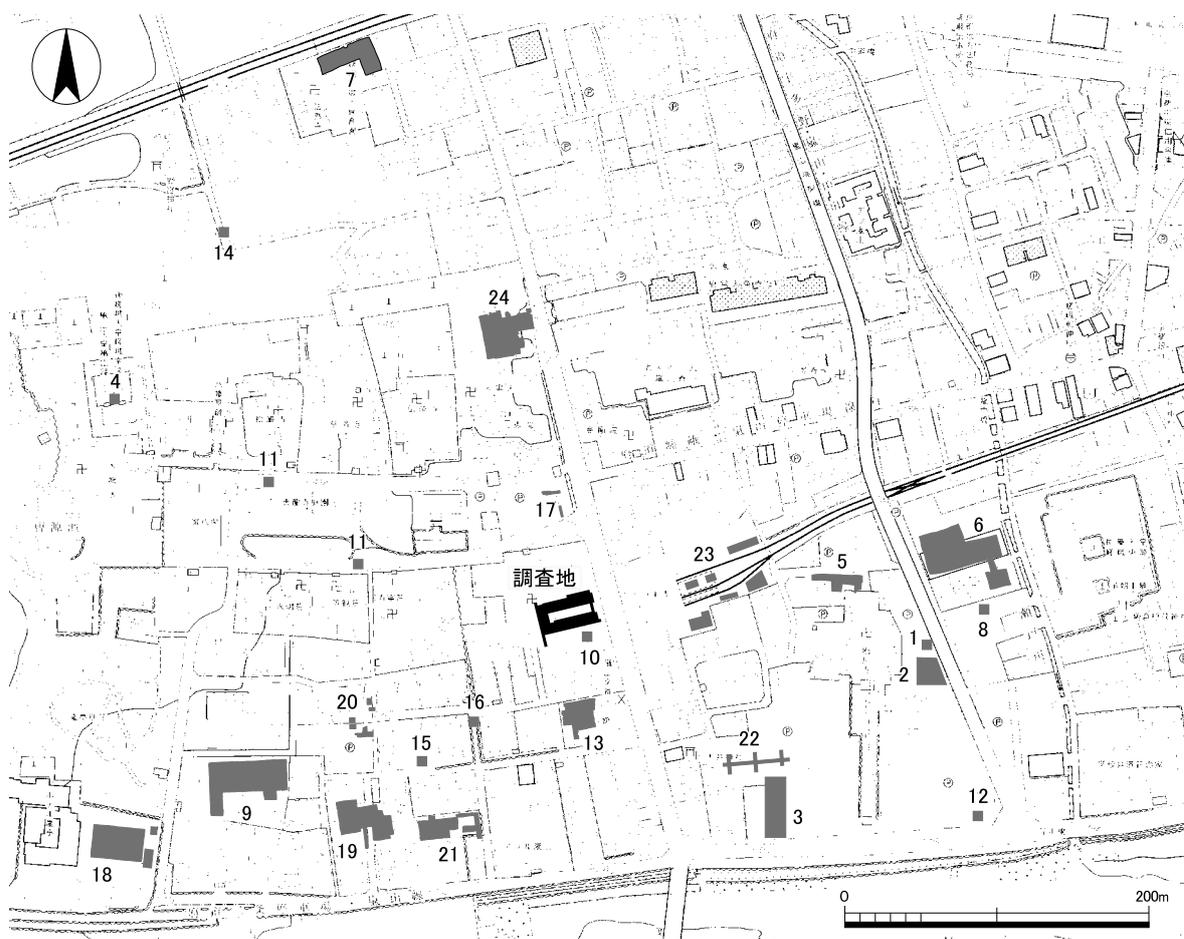


図1 調査位置図（1：5,000）

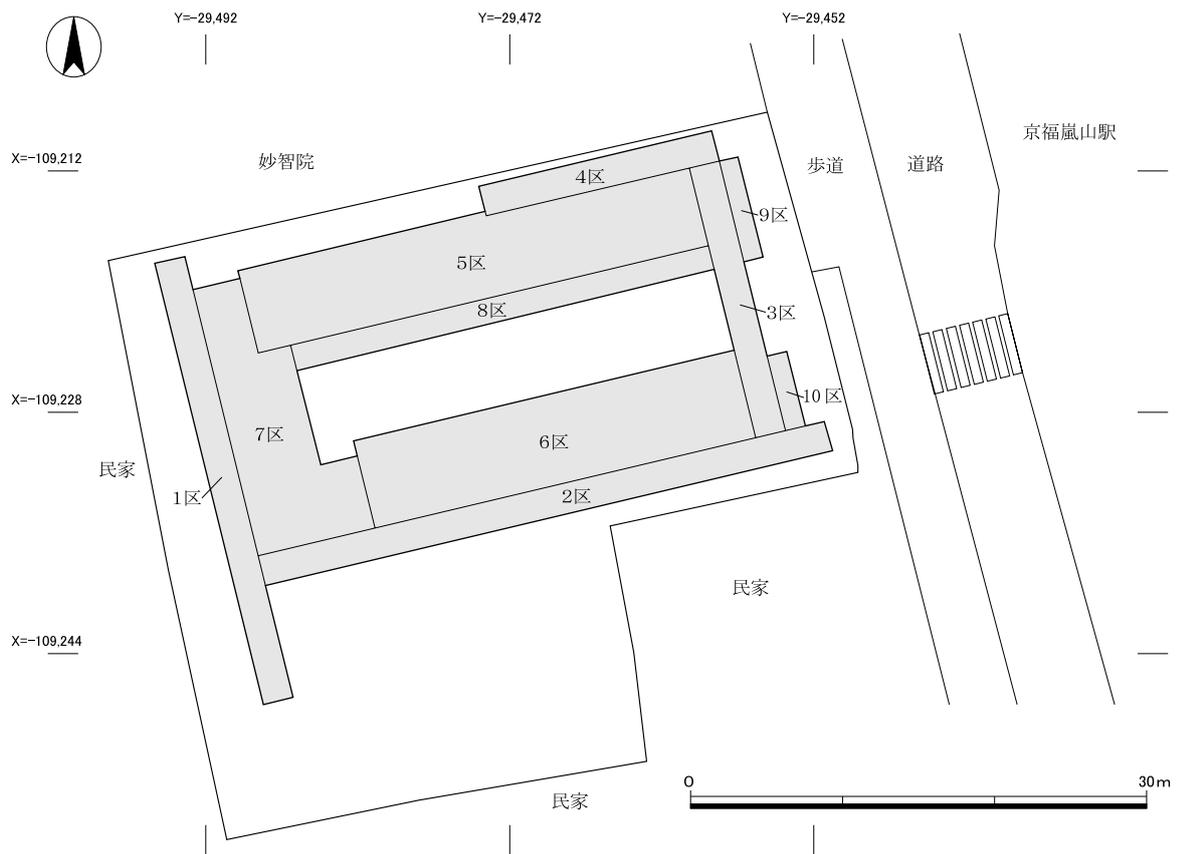


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前全景 (東から)



図4 調査風景 (北西から)



図5 遺構検出状況 (西から)



図6 遺構保存作業 (南西から)

28m、短辺約6mの未掘部分を残す「口字」形で、合計面積は約686㎡である。

各区の調査は、現代盛土を機械掘削で除去した後、人力によって遺構面を検出した。府・市文化財保護課の指導により、保存のため、遺構は検出のみにとどめ、一部を除いてそれ以上の掘削は行わなかった。調査は遺構検出・現代攪乱を掘削の後、実測図作成、写真撮影などの観察・記録作業を実施した。調査の後、遺構面を砂層で、各遺構を土嚢で保護し、順次、埋め戻しを行った。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は京都盆地の北西、保津峡から嵐山と小倉山の間を抜けて流れ込む桂川の左岸に位置している。この嵐山一帯は史跡・名勝に指定されており、西側には天龍寺と後山にあたる亀山、東には臨川寺、南には桂川（大堰川）に架かる渡月橋があり、川の対岸には奈良時代の創建と伝えられる法輪寺がある。

嵐山の周辺には嵯峨野と呼ばれる平地が広がっている。この嵯峨野は古墳時代に秦氏が開発を進めたとされ、平安時代には平安京近郊の景勝地として皇族や貴族たちの別業が多く営まれ、檀林寺などの寺院も建立された。

鎌倉時代には、後嵯峨天皇によって亀山殿（嵯峨御所）が造営され、亀山・後宇多上皇に引き継がれて御所として使用された。当時の様子を示す資料として天龍寺所蔵「山城国嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図」がある。これによれば嵐山一帯には道路などが整備され、亀山殿を中心に寺院や邸宅が建ち並んでいた景観が窺える。

室町時代には、亀山殿の跡地に足利尊氏が後醍醐天皇の菩提を弔うために、夢窓国師を開山として天龍寺を建立する（1345年完成）。天龍寺の東には後醍醐天皇が臨川寺を建立した。貞和三年（1347）に成立した天龍寺所蔵の「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」によれば、今回の調査地は「天龍寺領」となっている。以後は長く同様であったと考えられる。近代に入り天龍寺の寺域が縮小して宅地化が進み、現在は妙智院に南隣する民有地となっている。

(2) 周辺の調査（図1、表1）

今回の調査地周辺でこれまで実施された発掘・試掘調査を調査位置図（図1）と周辺調査一覧表（表1）にまとめた。主な遺構は、平安時代では、調査9で庭園状遺構、調査18で溝を検出している。鎌倉時代の遺構は、調査18で庭園跡、建物、溝を検出している。調査19では掘込み地業、溝などを検出しているが、これらは亀山殿関連遺構と考えられている。室町時代の遺構は調査13・19～21などで溝、堀などを多く検出しており、これらは区画溝や防御用の堀などと考えられている。調査19では柱穴列を検出しているが、天龍寺霊庇廟の関連遺構と考えられている。江戸時代の遺構は調査18で礎石建物、建物基礎、塀などを検出している。

表1 周辺調査一覧表

No.	遺跡名	所在地（右京区）	方法	調査期間	概要	文献
1	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町	発掘	1969. 11	庭園跡を検出。鎌倉時代～江戸時代の遺物。	1
2	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町	発掘	1974. 12	室町時代の溝・柱穴。室町時代の軒瓦・瓦。	2
3	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町	発掘	1975. 12	平安時代後期のピット、室町時代の石組溝。平安時代後期の土師器、室町時代の天目椀・青磁・須恵器。	3
4	後嵯峨天皇陵 ・亀山天皇陵	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	試掘	1976. 03. 23 ～03. 28	石垣状遺構・集石、土師器・陶器・瓦。	4
5	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町	発掘	1976. 09	焼け落ちた状態の建物を検出。室町時代の天目椀・染付・青磁・白磁・陶器・軒瓦・瓦。	5
6	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町3-11	発掘	1977. 02. 01 ～04. 08	室町時代・江戸時代の土坑・溝、土師器・陶器・軒瓦・瓦。	6
7	檀林寺跡	嵯峨天龍寺立石町1-36	発掘	1977. 08. 01 ～08. 12	平安時代～室町時代の土坑、軒瓦・瓦。	7
8	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 30-20、22	試掘	1986. 04. 02	室町時代の包含層、土師器・瓦。	8
9	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 33	発掘	1989. 02. 01 ～05. 13	平安時代の庭園状遺構（園池・洲浜・景石の抜き穴）・焼土坑・ピット、室町時代の溝・土坑、江戸時代のピット。	9
10	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 40-8	試掘	1989. 02. 10	室町時代の土坑、土師器・瓦・礎石。	10
11	史跡特別名勝 天龍寺庭園・ 史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺竜門町・角 倉町・立石町・芒ノ馬 場町	広域 立会	1990. 03 ～1992. 02. 26	飛鳥時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代の土坑・溝・包含層、土師器・軒瓦・瓦。	11
12	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺造路町	試掘	1992. 03. 11	室町時代の溝・包含層、軒瓦・瓦。	12
13	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 3-25・27・41・50	発掘	1992. 09. 16 ～1993. 02. 16	平安時代の柱穴、鎌倉時代の濠、室町時代の濠・地業・竈状遺構・柱穴・土坑、江戸時代の溝・柱穴・土坑。	13
14	史跡名勝嵐山	嵯峨小倉山小倉町・田淵 山町・天竜寺芒ノ馬場町 ・野々宮町・立石町	広域 立会	1995. 06. 20 ～1996. 01. 17	平安時代前期の土坑・溝、平安時代後期の溝、鎌倉時代～南北朝時代の土坑・路面、室町時代～戦国時代の土坑・落込、江戸時代の土坑。	14
15	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 3-39	試掘	2000. 05. 10	室町時代の柵列・土坑・整地層、土師器・軒丸瓦。	15
16	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 3-33、42	発掘	2002. 08. 05 ～08. 12	室町時代の石組溝、土師器・陶器・瓦類・石臼。	16
17	史跡特別名勝 天龍寺庭園	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 68	試掘	2004. 02. 23 ～03. 31	室町時代の土坑・溝。	17
18	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 11	発掘	2004. 06. 07 ～09. 25	平安時代の溝、鎌倉時代の庭園跡・掘立柱建物・溝・低地・土坑、室町時代の土坑・焼瓦溜・塀・堀、江戸時代の礎石建物・独立基礎建物・塀・土坑。	18
19	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 7	発掘	2004. 08. 12 ～11. 12	鎌倉時代後期の掘込み地業・土坑・溝・焼土層、室町時代前期の土坑・柱穴群・大型柱穴・溝、室町時代後期～江戸時代の土坑・柱穴・溝、幕末～近代の土坑・溝・竈・礎石。	19
20	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 10-1、14	発掘	2004. 10. 27 ～11. 30	室町時代の土坑・溝・石垣、土師器・瓦器・焼締陶器・瓦。	20
21	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町	発掘	2006. 06. 05 ～09. 15	鎌倉時代の柱列、室町時代の石組堀・土坑、江戸時代の土坑・石室・石列など。	21
22	臨川寺跡	嵯峨天龍寺造路町	試掘	2009. 08. 17 ～09. 03	平安時代前期の包含層・河川、中世の整地層、江戸時代の礎石・集石状遺構。	22
23	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺造路町	発掘	2012. 03. 14 ～04. 16	中世の土坑、江戸時代の以降の土坑。	23
24	史跡名勝嵐山	嵯峨天龍寺芒ノ馬場町 17、25-2、32-2	発掘	2011. 09. 05 ～2012. 06. 11	平安時代の溝・土坑、室町時代の堀・柱穴、桃山時代の井戸、江戸時代の池、土師器・緑釉陶器・軒平瓦。	24

文献（表1 周辺調査一覧表）

- 1 牛川善幸「臨川寺庭園の調査」『奈良国立文化財研究所年報1970』 奈良国立文化財研究所 1970年
- 2 江谷 寛『臨川寺庭園遺跡発掘調査概要』 臨川寺庭園遺跡発掘調査団 1975年
- 3 江谷 寛「臨川寺旧境内」『佛教芸術 115号』 毎日新聞社 1977年
- 4 笠野 毅「後嵯峨天皇陵・亀山天皇陵配水管設置箇所的事前調査」『書陵部紀要』 第二十六号 宮内庁書陵部 1980年
- 5 3と同じ
- 6 吉川義彦他『臨川寺旧境内発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第4冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年
- 7 鈴木久男「檀林寺跡」『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 8 「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』 京都市文化観光局 1987年
- 9 木下保明「史跡名勝嵐山」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 10 「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』 京都市文化観光局 1990年
- 11 小檜山一良「史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山2」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 12 「試掘調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成4年度』 京都市文化観光局 1993年
- 13 久世康博「史跡名勝嵐山」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 14 小檜山一良「史跡名勝嵐山」『平成7年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- 15 堀 大輔「史跡名勝嵐山」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度』 京都市文化市民局 2001年
- 16 菅田 薫・吉本健吾『史跡名勝嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002 - 10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 17 丸川義広「史跡・特別名勝 天龍寺庭園」『平成16年度 財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 18 内田好昭『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004 - 7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 19 布川豊治『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004 - 11 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2005年
- 20 平尾政幸「史跡・名勝嵐山」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成16年度』 京都市文化市民局 2005年
- 21 小檜山一良『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006 - 9 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 22 未報告
- 23 東 洋一『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012 - 1 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
- 24 小松武彦『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012 - 3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年

3. 遺 構

(1) 遺構の概要

現代盛土を除去すると、調査区の西側には整地層が広がり、東側は地山となる。遺構面は東側から西側に緩やかに高くなる。北西部は現代攪乱が深く、地山に達する。遺構の残存状況は調査地の南西部が比較的良好である。検出した主な遺構は、室町時代後期の柱穴列・建物跡・溝・整地層、江戸時代の溝・土坑などである。室町時代後期以前の遺構は検出できなかった。

(2) 層 序 (図7・8)

調査区西壁中央部では、現代盛土が厚さ約0.7m、室町時代後期の包含層(暗褐色～黒褐色砂泥)が厚さ約0.6m、以下地山(黒褐色砂泥が厚さ約0.25m、暗褐色砂泥層が厚さ0.3m以上)となる。東側の現道路から西へ14～17m前後まではほぼ地山面が遺構面である。その西側には整地層があり、現道路面より0.4～0.8m高い。なお、調査区壁断面図(図7・8)は、調査の各段階で記録した主なものを掲載し、壁際の遺構を図示した。

(3) 遺 構

検出した遺構は、室町時代後期と江戸時代および江戸時代末期以降に大別できる。なお、遺構保存のため完掘していないため、各遺構の深さは不明であり、一部を除き記述していない。

室町時代後期 (図9)

整地層35・144・145・155 (図9) 調査区南西部から中央部と北側中央部に広がる室町時代後期の整地層である。壁断面観察によると、深い所で厚さ約0.6mあり、2層に分層できる。この整地層上面で、室町時代後期の遺構を検出した。

建物10 (図11、図版4-2) 調査区南側中央部で検出した。径0.15～0.3mの礎石が東西方向に2列並ぶ。北列は2間、長さ約4.8m、柱間は西から約1.2m、約3.6mである。南列は2間、長さ約3.9m、柱間は西から約3.0m、約0.9mである。北列と南列の柱間は約1.0mである。方位は東に対して北へ12.5度前後振れる。

石列132 (図12) 調査区南西部で検出した。約1.5mにわたり、径0.1～0.4mの石が東西方向に

表2 遺構概要表

時 代	遺 構
室町時代後期	土坑1・4・124、石列132・151、柱穴列152・153、建物10、柱穴122、溝83・85・88・97・108・136・141・149、整地層35・144・145・155
江戸時代	土坑143・155、柱穴列156・161、溝8・9・47・89、井戸103、整地層12・42・52
江戸時代末期 ～近代	土坑70・93、溝2、路面43

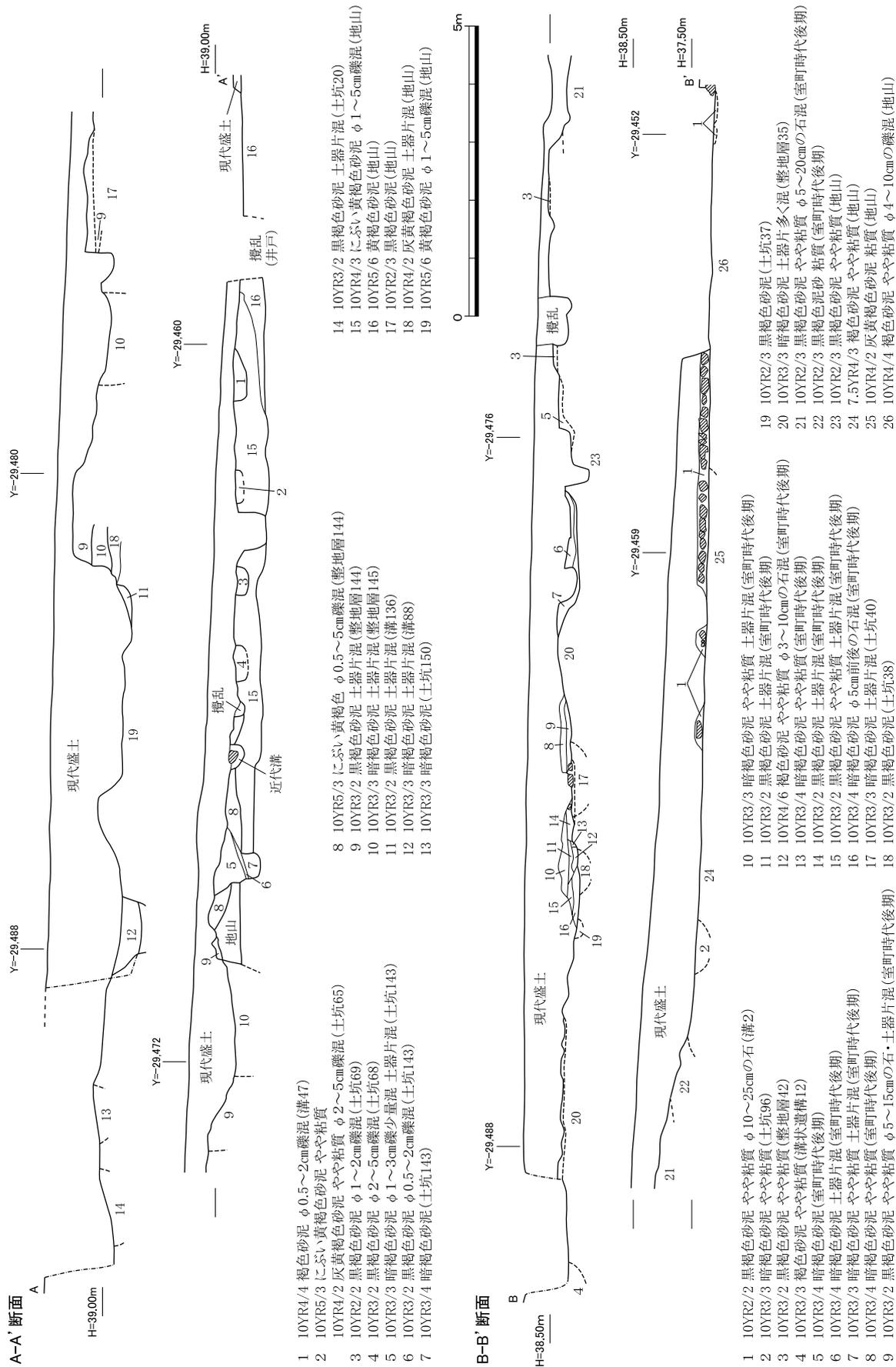
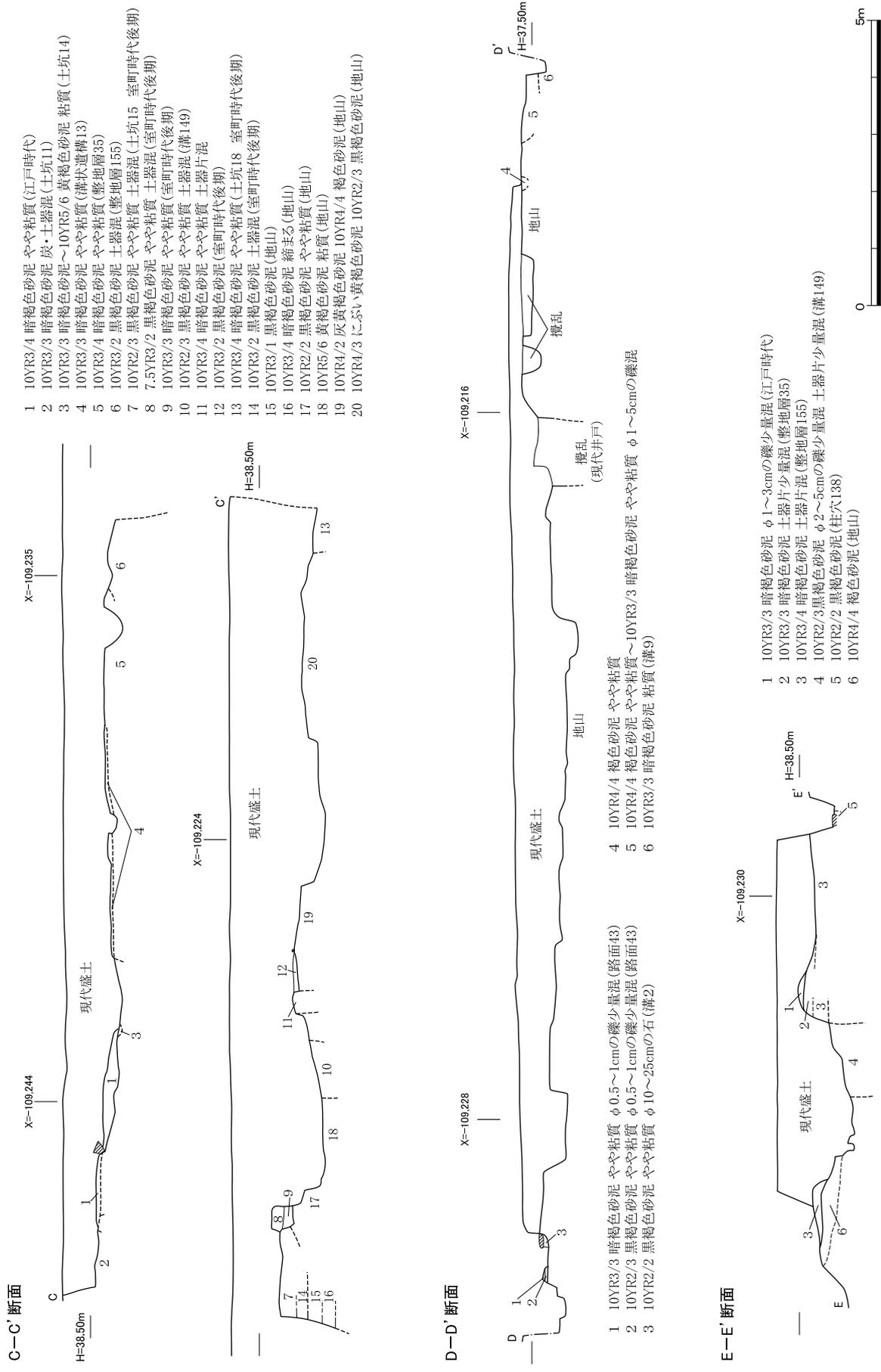


図7 調査区断面図1 (1:100)



- 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質(江戸時代)
- 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭・土器混(土坑11)
- 3 10YR3/3 暗褐色砂泥 ~10YR5/6 黄褐色砂泥 粘質(土坑14)
- 4 10YR3/3 暗褐色砂泥 やや粘質(溝状遺構13)
- 5 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質(整地層35)
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥 土器混(整地層155)
- 7 10YR2/3 黒褐色砂泥 やや粘質 土器混(土坑15 室町時代後期)
- 8 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 やや粘質 土器混(室町時代後期)
- 9 10YR3/3 暗褐色砂泥 やや粘質(室町時代後期)
- 10 10YR2/3 黒褐色砂泥 やや粘質 土器混(溝149)
- 11 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質 土器片混
- 12 10YR3/2 黒褐色砂泥 (室町時代後期)
- 13 10YR3/4 暗褐色砂泥 やや粘質(土坑18 室町時代後期)
- 14 10YR3/2 黒褐色砂泥 土器混(室町時代後期)
- 15 10YR3/1 黒褐色砂泥 (地山)
- 16 10YR3/4 暗褐色砂泥 縮まる(地山)
- 17 10YR2/2 黒褐色砂泥 やや粘質(地山)
- 18 10YR5/6 黄褐色砂泥 粘質(地山)
- 19 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 10YR4/4 褐色砂泥(地山)
- 20 10YR4/3 におい黄褐色砂泥 10YR2/3 黒褐色砂泥(地山)

- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~3cmの礫少量混(江戸時代)
 - 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 土器片少量混(整地層35)
 - 3 10YR3/4 暗褐色砂泥 土器片混(整地層155)
 - 4 10YR2/3 黒褐色砂泥 φ2~5cmの礫少量混 土器片少量混(溝149)
 - 5 10YR2/2 黒褐色砂泥(柱穴138)
 - 6 10YR4/4 褐色砂泥(地山)
- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ0.5~1cmの礫少量混(路面43)
 - 2 10YR2/3 黒褐色砂泥 やや粘質 φ0.5~1cmの礫少量混(路面43)
 - 3 10YR2/2 黒褐色砂泥 やや粘質 φ10~25cmの石(溝2)
- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~3cmの礫少量混(江戸時代)
 - 2 10YR3/3 暗褐色砂泥 土器片少量混(整地層35)
 - 3 10YR3/4 暗褐色砂泥 土器片混(整地層155)
 - 4 10YR2/3 黒褐色砂泥 φ2~5cmの礫少量混 土器片少量混(溝149)
 - 5 10YR2/2 黒褐色砂泥(柱穴138)
 - 6 10YR4/4 褐色砂泥(地山)

図8 調査区断面図2 (1:100)



図10 遺構平面図 (江戸時代以降、1 : 200)

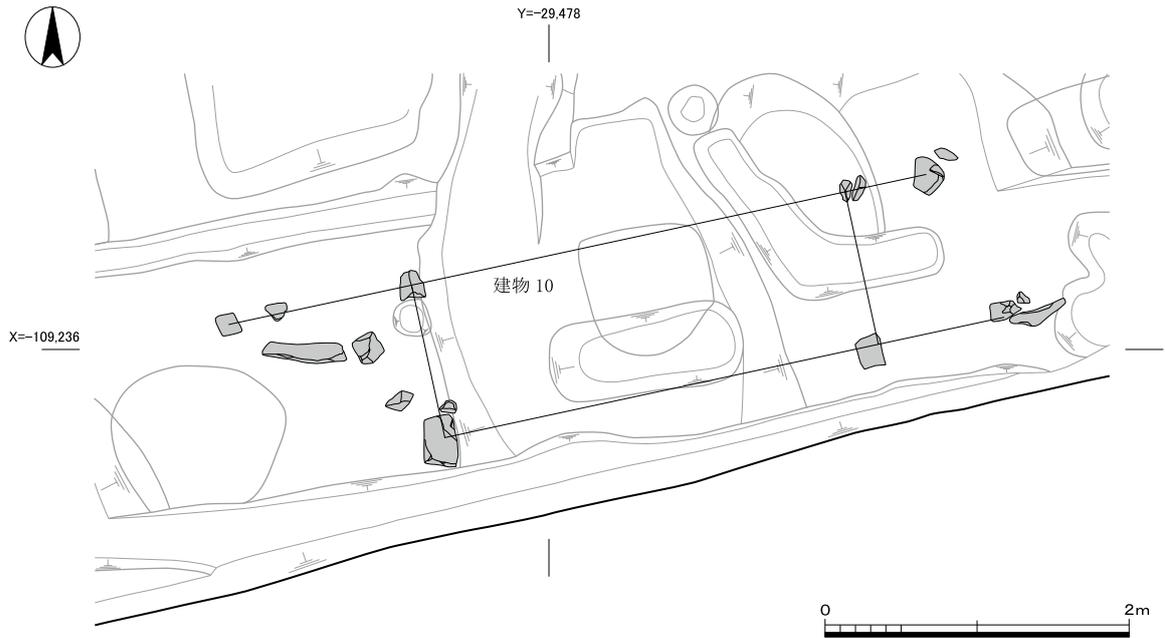


図11 建物10平面図（1：50）

8個連なり、石と石の距離は短く列状である。その列は東に対して少し北へ振れる。周囲には幅0.6m前後、長さ約2.4mの掘形がある。これらは検出状況から布掘基礎の可能性はある。

石列151（図12） 調査区西側中央部で検出した。約2.1mにわたり、径0.15～0.3mの石が東西方向に7個並び、石と石の距離は不均等であり列状である。方位は東に対して北へ13.5度前後振れる。周囲には幅0.7m前後、長さ約2.6mの掘形がある。これらは検出状況から布掘基礎の可能性はある。

柱穴列152（図12） 調査区西側中央部で検出した。径0.1～0.3mの石を伴う柱穴が東西方向に3基並ぶ。長さ約5.1m、柱間は西から約3.3m、1.8mである。方位は東に対して北へ11.5度前後振れる。石の上面は検出面の整地層上面より0.4m前後、地山の黒褐色砂泥層を掘り込むことから、柱を受ける地下式礎石と思われる。

柱穴列153（図12） 調査区西側中央部で検出した。径0.1～0.3mの石を伴う柱穴が南北方向に2基並ぶ。柱間は約1.3mである。方位は北に対して西へ10度前後振れる。北側の柱穴119には石を伴う柱穴118が隣接している。柱穴列152の柱穴120の直上に柱穴列153の柱穴119は据えられており、柱穴118を切る。

柱穴122（図12） 調査区南西部で検出した。形状は径0.5m前後の楕円形である。径0.3m前後の石を伴う。礎石であろう。

土坑124（図12） 調査区南西部で検出した。幅0.4m前後、長さ約0.9mの細長い楕円形である。径0.1～0.3mの石を3個伴う。柱穴122と土坑124の両者が一連のものとするれば、建物の一部と考えられ、その距離は約1.3mである。

溝83（図9） 調査区北側中央部で検出した。幅1m前後、検出長約5mの東西溝である。

溝85（図9） 調査区北側西部で検出した。幅1m前後、検出長約6mの東西溝である。西側は

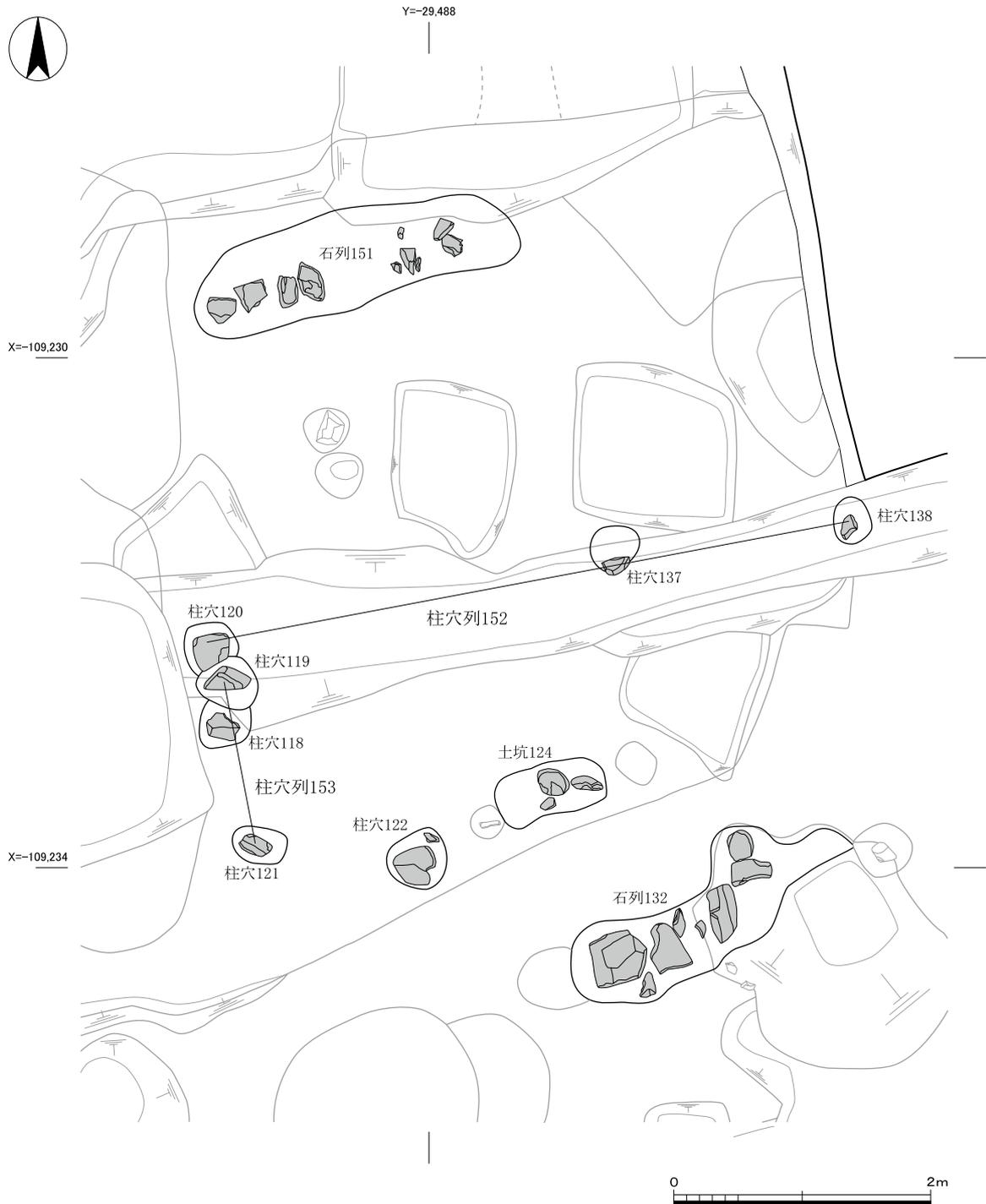


図12 石列・柱穴列・柱穴平面図（1：50）

江戸時代の土坑に攪乱されている。溝83の西側にあり、その検出面より約0.5m低い、検出状況から溝83と同じ溝であろう。

溝108（図9） 調査区北側中央部で検出した。幅1m前後、検出長約3mの東西溝であり、東に対してやや北に振れるが、溝83・85と同じ溝である可能性が高い。

溝141（図9） 調査区北西部で検出した。幅0.5m前後、検出長約1.5mの東西溝であり、溝85の西延長上にある。同じ溝の可能性はある。

溝88(図9) 調査区北西部で検出した。幅1.2m前後、検出長約9mの南北溝であり、調査区外北に延びる。南端部は後述する溝149と合流する。

溝136(図9) 調査区北側西寄りで検出した。幅0.8m前後、検出長約1.5mの南北溝であり、調査区外南に延びる。

溝97(図9) 調査区東側中央部で検出した。幅1.2m前後、検出長約10mの東西溝であり、調査区外西へ延びる。

溝149(図9) 調査区西側中央部で検出した。幅1.2～2m、検出長約7mの東西溝であり、調査区外の西と東へ延びる。溝97の延長線上にあり、同一溝の可能性が高い。また溝97・149の埋土は、下層は締まり、室町時代後期の遺物が多く出土した。これに対して上層は締まりのない埋土である。

以上の記述した溝の方位は、いずれもほぼ正方位である。

江戸時代以降(図10)

整地層42・52(図10) 調査区北側と南側中央部に広がる江戸時代の整地層である。整地層42は室町時代後期の整地層の上に積み重なり、島状に高くなっている。おそらく室町時代後期整地層の上には江戸時代の整地層が広く堆積していたが、後世に削平されて残った部分と考えられる。整地層52は調査区北側に広がる。深く掘られた現代攪乱の壁による層位観察から、下層には室町時代後期の整地層が堆積していると考えられる。これらの整地層上面で江戸時代の遺構を検出した。

土坑143(図13) 調査区北東部で検出した。検出した幅約0.3m、長さ約1.1mある。南側は現代攪乱により失われており、その攪乱壁面における層位観察から深さは約0.7mである。上面で瓦片を多数検出した。

土坑155(図10) 調査区北西部で検出した長辺約1.8m、短辺1.0m前後の方形土坑である。周囲は深い現代攪乱で失われている。室町時代後期の土坑150の上に重なる。この遺構は現代攪乱により削平され、島状に残った整地層の可能性はある。

柱穴列156(図14) 調査区北側中央部で検出した。東西方向に並ぶ径0.2～0.3mの石を伴う柱穴3基からなる。長さ約5.2m、柱間は西から約2.7m、2.5mである。方位は東に対して北へ14度前後振れる。

溝47(図15、図版4-3) 調査区北側東部で検出した。北側は溝9に切られ、南側は現代攪乱によって失われる。検出した幅は約0.9m、長さ約5.7m、深さ0.2m前後である。

柱穴列161(図15、図版4-3) 溝47の埋土を切り込んで検出した。径0.1～0.5mの石が4基並び、その距離は南から約0.9m、0.8m、1.5mである。方位は北に対して西へ13.5度前後振れる。

溝8(図10) 調査区北西部で検出した。幅1.4m前

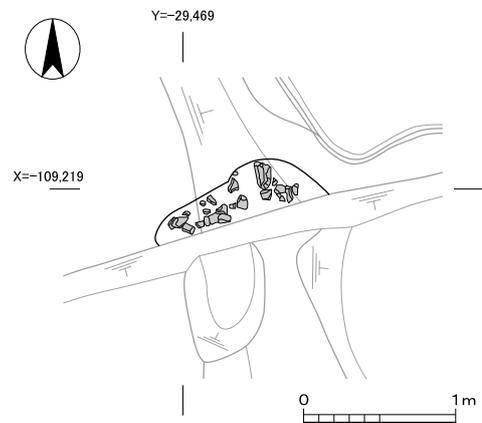


図13 土坑143平面図(1:50)

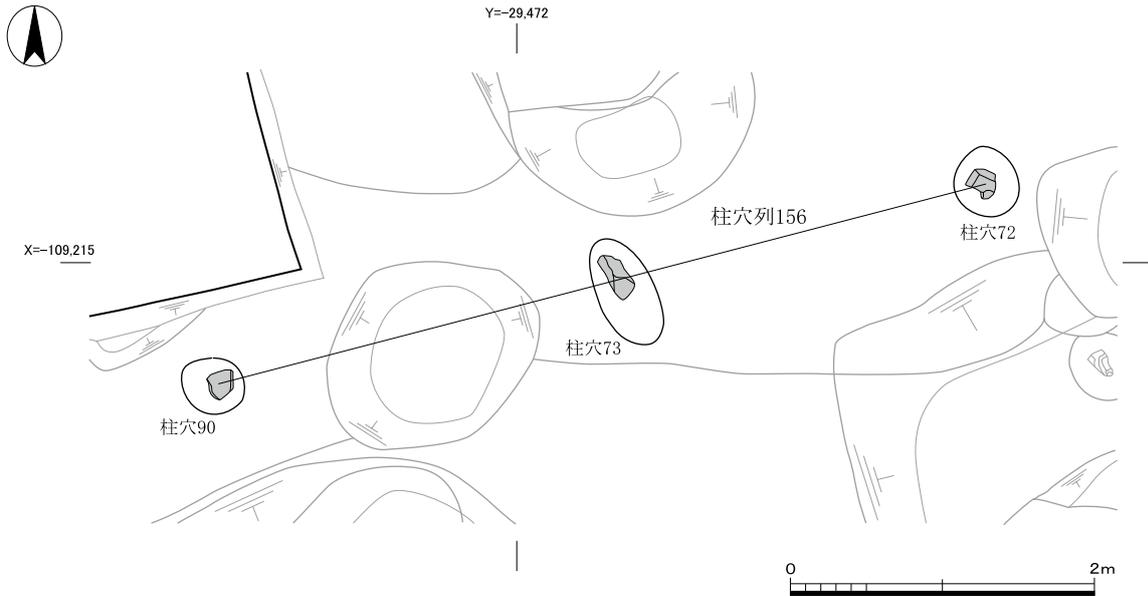
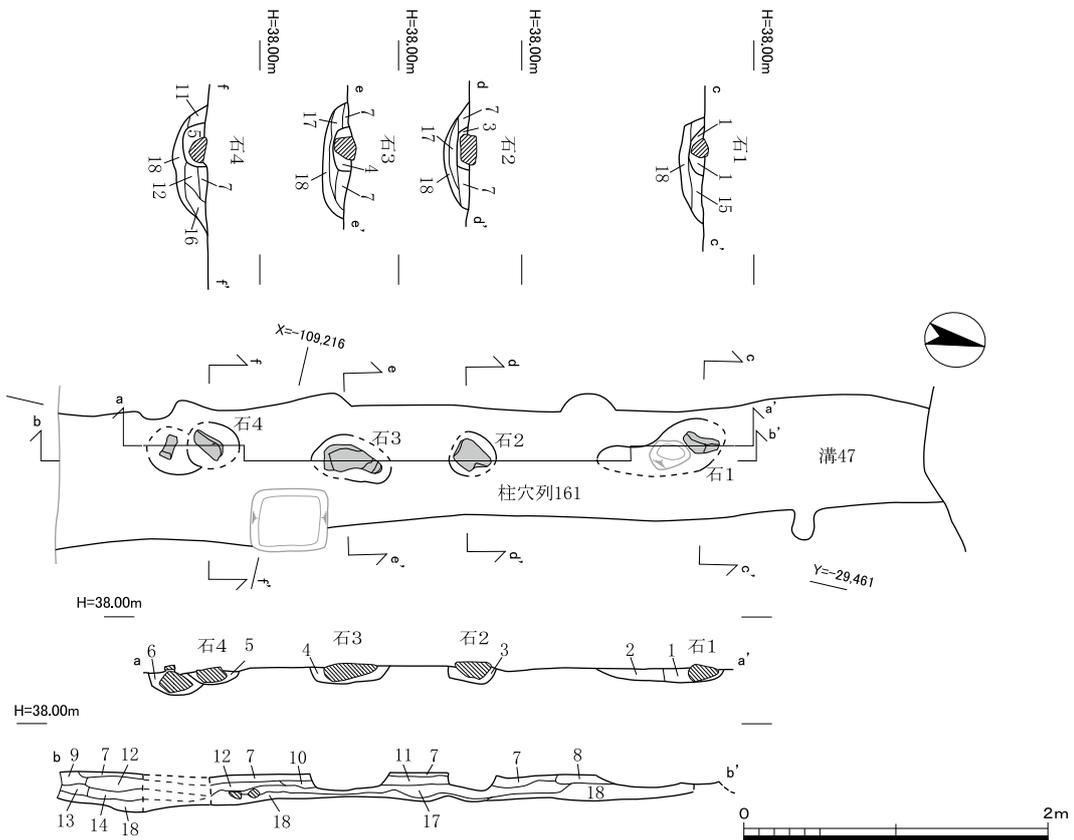


図14 柱穴列156平面図 (1 : 50)



- | | |
|----------------------------------|---|
| 1 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 やや粘質 土器・炭微量混 | 10 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥ブロック混 |
| 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 土器・炭少量混 | 11 10YR3/3 暗褐色砂泥 土器中量混 |
| 3 10YR4/2 灰黄褐色 土器片微量混 | 12 10YR3/2 黒褐色砂泥 土器・炭微量混 10YR4/3 にぶい黄褐色 |
| 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 土器片微量混 | 13 10YR4/4 褐色砂泥 10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロック混 |
| 5 10YR3/1 黒褐色砂泥 固く締まる | 14 10YR4/4 褐色砂泥 |
| 6 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 φ2~4cm礫混 | 15 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| 7 10YR3/3 暗褐色砂泥~10YR4/4 褐色砂泥 砂礫混 | 16 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 土器片混 |
| 8 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 土器・炭少量混 | 17 10YR4/4 褐色砂泥 10YR3/2 黒褐色砂泥 |
| 9 10YR2/1 黒色砂泥 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 18 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 |

図15 溝47・柱穴列161実測図 (1 : 50)

後、検出長約6.5mの南北溝であり、調査区外北に延びる。

溝9 (図10) 調査区北側東部で検出した。検出幅は0.8～1.5m、長さ約15mあり、北側は調査区外に広がり、調査区外の東西に延びる。方位は東に対して北へ135度前後振れる。現代攪乱壁面の層位観察では、埋土の上層はやや柔らかく江戸時代の遺物が出土したが、下層は固めに締まり室町時代後期の遺物が多く出土した。この溝の時期は室町時代後期まで遡る可能性がある。

溝89 (図10) 調査区北側中央部で検出した。幅1.4m前後、検出長約3.7m、調査区外北に延びる。

井戸103 (図10) 調査区南側中央部で検出した。径1.3～1.6mの楕円形であり、中に径約0.9m、厚さ約0.1mの漆喰の円形枠がある。

土坑70・93 (図16、図版4-4) 調査区北側東部で検出した。甕が埋められている土坑である。土坑70は径0.6m前後の円形の掘形に、径約0.55mの甕が埋まる。土坑93は径0.7～0.9mの楕円形の掘形に、径約0.5mの甕が埋まる。両者の甕下部内側は灰白色の薄い層が付着する。いわゆる便所甕であろう。埋土には煉瓦が含まれていることから、廃棄年代は近代である。

路面43 (図10) 調査区南側西半で検出した。東西約17m、厚さ約0.15mであり、硬化面が2面ある。北側に石組のある側溝(溝2)を伴う。路面は近現代の水道管などの埋設遺構により掘り込まれて、失われた部分が多いが、硬化面が重複し、厚いことから長く使用されたと思われる。この路面の造作された時期は江戸時代末期に遡る可能性がある。

溝2 (図10) 路面43の北側で検出した。幅0.7m前後、検出した長さ約13m、深さ0.2m前後ある。溝の北側は奥行き0.1m前後、幅0.1～0.3mの細長い石が東西に約4m並ぶ。溝の南側は所々石があるが、ほとんど残っておらず、もともと石が組み立てられていなかった可能性も残る。埋土にはビニールが含まれていることから廃棄年代は近現代である。

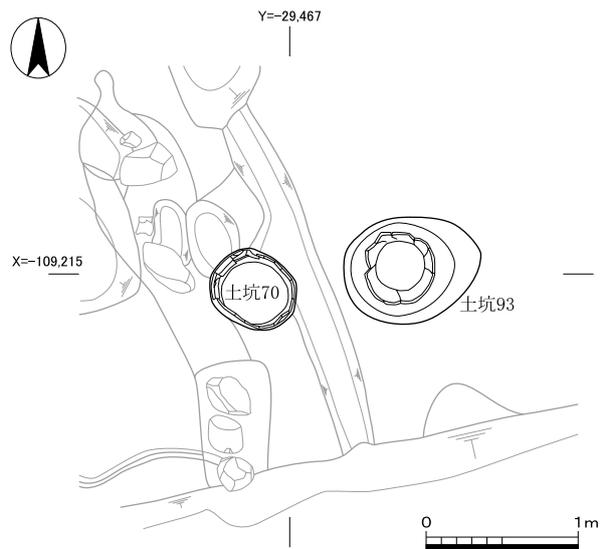


図16 土坑70・93平面図(1:50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要 (表3)

遺物は整理箱で12箱出土した。遺構は検出にとどめ、一部を除いて掘り下げなかったため、主に遺構検出と近現代攪乱から出土したものであり、小片が多く、出土量は少ない。内訳は土器類が大半を占め、他に瓦類や石製品などがある。出土遺物の時期は平安時代から江戸時代にわたっており、その中で多い遺物は室町時代後期から江戸時代前期のもの、次に江戸時代末期のものであり、他の時期の遺物は少量である。室町時代後期から江戸時代前期の遺物は溝や整地層などから、江戸時代末期の遺物は調査区南側の土坑、整地層などから出土したものが多く、それらの中から、図化できるものを選び図示した。なお、土師器の年代は平安京・京都I期～XIV期編年案に準拠した。口径は1点(7)を除き復元値である。

(2) 土器類 (図17、図版5)

1～9は土師器皿である。1はいわゆるへそ皿で、口径7.0cm。2は口径9.4cmで、体部外面上半はナデ調整で、器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。1・2は溝136から出土した。3は口径6.9cm、体部外面上半はナデ調整を施す。へそ皿であろう。柱穴30から出土した。4は口径8.0cm、体部外面上半はナデ調整で外反する。へそ皿と思われる。調査区南西部の整地層35から出土した。5は口径8.0cm、体部外面上半はナデ調整で外反する。6は口径11.0cm、体部外面上部はナデ調整で外反する。5・6は建物10に伴う整地層から出土した。7はほぼ完形で口径11.6cm、体部外面上部はナデ調整で、器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。土坑4から出土した。8は口径15.0cm、9は口径15.6cm、体部外面上半はナデ調整で外反する。8・9は土坑1から出土した。1～9の時期は京都IX期新～X期中に比定できる。

10・11は土師器皿である。10は口径10.6cm、口縁部外面はナデ調整、器壁は厚手で7mm前後、内

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	緑釉陶器、須恵器、瓦				
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、施釉陶器、焼締陶器、輸入磁器、瓦類		土師器9点、軒丸瓦1点、埴1点		
桃山時代 ～江戸時代	土師器、土師質土器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦類、土製品、石製品、金属製品		土師器2点、土師質土器1点、施釉陶器1点、軒丸瓦1点、軒平瓦1点、刻印平瓦1点、石臼1点		
合計		14箱	19点(2箱)	12箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

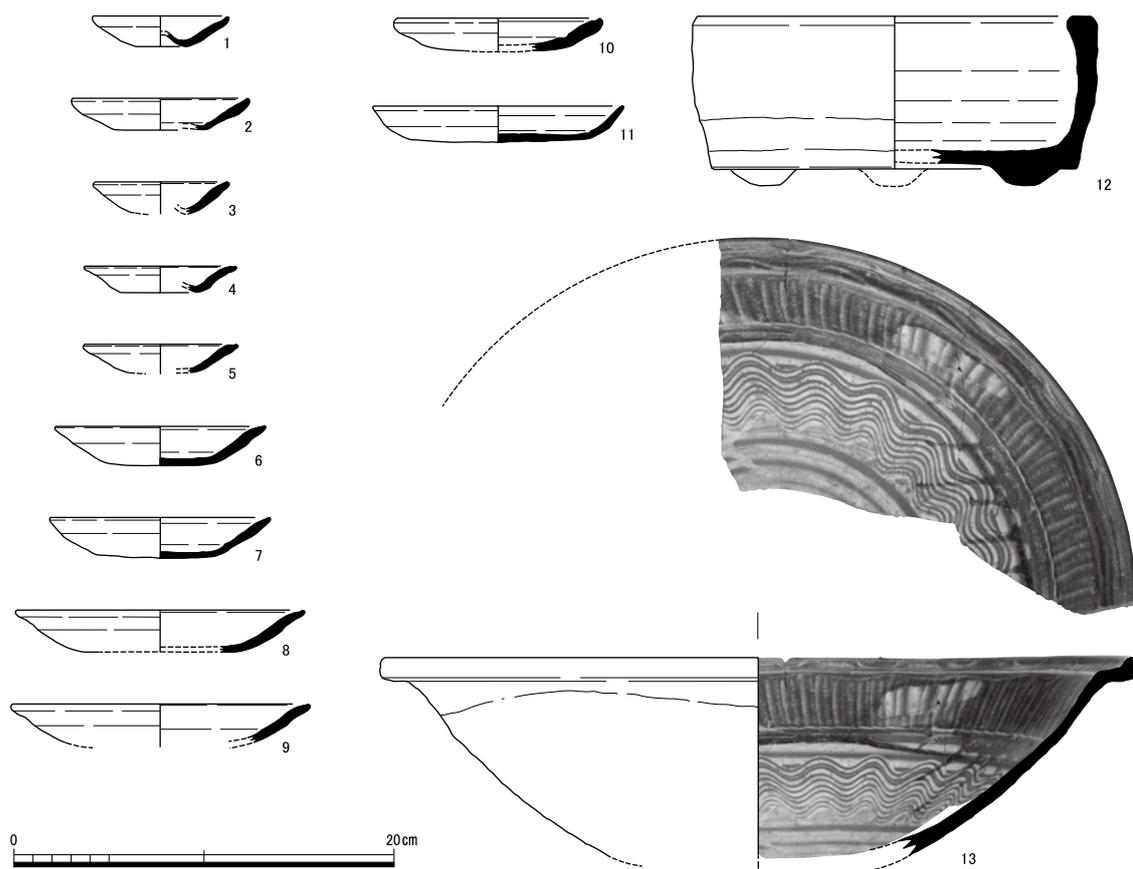


図17 土器実測図（1：4）

面に圈線を巡らす。整地層42から出土した。11は口径13.3cm、体部外面上部はナデ調整、内面に浅い圈線を巡らす。土坑155から出土した。10・11の時期は京都Ⅺ期中～新に比定できる。

12は土師質火鉢である。口径は20.6cm、体部外面下部と底部内面を除きナデ調整である。時期は江戸時代前期であろう。土坑143から出土した。

13は肥前の施釉陶器鉢である。口径は39.2cm、口縁部と体部内面に施釉する。時期は江戸時代前期から中期である。溝149の直上層から出土した。

（2）その他の遺物

瓦類（図18、図版5）

14は軒丸瓦であり、外区は珠文帯、内区には文字を配する。天龍寺の「寺」「龍」であろう。土坑22から出土した。この種の文字瓦は天龍寺近辺の調査でも出土している²⁾。

15は巴文軒丸瓦である。外区は珠文帯、内区は左卷巴である。三巴であろう。整地層42から出土した。

16は唐草文軒平瓦である。溝8から出土した。

17は塼であり、厚さ3cm前後である。整地層35から出土した。

18は刻印のある平瓦である。端面に径1cm前後の菊花文が押されている。整地層35上面から出土した。

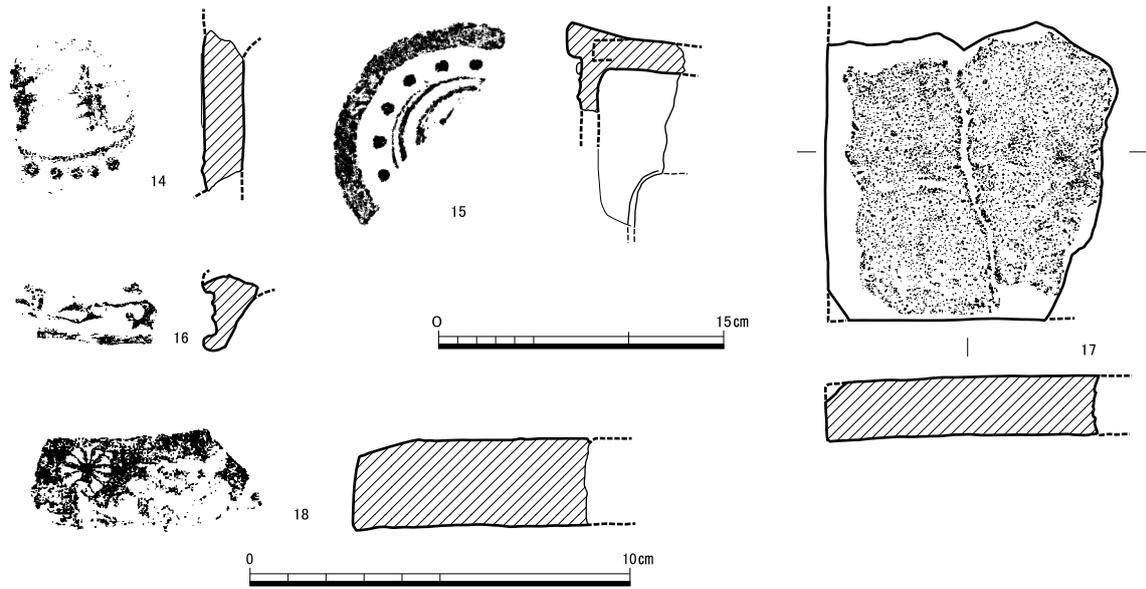


図18 瓦類拓影・実測図（1：4、18のみ1：2）

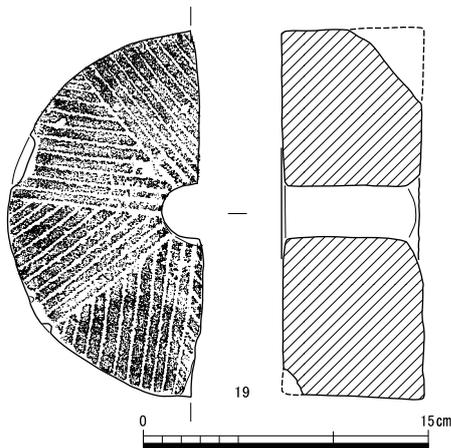


図19 石臼拓影・実測図（1：4）

石製品（図19、図版5）

19は石臼である。径19.4cm前後、摺り面はわずかにくぼみ、摺り目は9～10条、8区画であり、側面は表面を滑らかに調整している。茶臼の上臼であろう。整地層42から出土した。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 加納敬二・小檜山一良ほか『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1997年 図75に軒平瓦、内田好昭『史跡・名勝 嵐山』京都市埋蔵文化財研究所調査概報 2004-7 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年 図18に軒丸瓦がある。

5. まとめ

調査で検出した主な遺構は、整地層、溝、柱穴列、石列、建物跡などである。

室町時代後期の整地層は、厚い部分では2層に分層できたが、その実年代は、出土遺物から、下層（旧期とする）が15世紀末から16世紀前半、上層（新时期とする）が16世紀前半から中頃と考える。旧期は整地層145・155、新时期は整地層35・144に比定できる。

調査区北側で多く検出した室町時代後期の溝は、整地層より深く開削され、規模の大きなもので、区画溝あるいは堀と考えられる。調査区南西部では、整地層35・155を掘り込む建物跡や石列、柱穴列などを多くを検出した。

これらの遺構は、方位に違いが認められる。溝は正方位である。一方建物跡や石列、柱穴列などは北に対して11.5～13.5度西偏し、現道路に沿う地区割りの傾きである。これらの方位の違いは、遺構の時期の違いを示すものと考えられる。既往の調査成果から、偏る方位はこの地域の条里に沿うもの、正方位のものは天龍寺伽藍中心線に沿うものとされている。傾く方位が新时期に比定でき、正方位のものは旧期と考えられる。

出土遺物は、少量であるが寺名入り文字瓦、塼などが出土している。これらは寺院に関連のある遺物である。

天龍寺所蔵の「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」（1347年）によると、調査地付近は寺領あるいは天龍寺領となっており、以後も同様であったと考えられる。天龍寺は造営後に幾度も火災に遭っているが、中でも応仁2年（1468）の応仁文明の乱では多大な被害を受けたとされ、その復興は、天正13年（1585）豊臣秀吉の寄進によって本格的に始まった。調査地付近はその後、幕末の兵火、明治初期の「上地」を経て、近代には塔頭と民有地¹⁾になっていったとされる。

以上、検出した遺構、出土した遺物、史料などから、調査地は、室町時代後期以降、天龍寺関連の施設や塔頭などに利用され、近代に入ると南側は民有地になり、宅地などに利用され、残りの北側も遅れて宅地化していったと考えられる。

註

- 1) 小林善仁「近代初頭における天龍寺境内地の景観とその変化」『佛教大学歴史学部論集第2号』 佛教大学歴史学部 2012年

圖 版



1 1区全景（北から）



2 2区全景（西から）



3 3区全景（北から）



4 4区全景（東から）



1 5区全景（南西から）



2 6区全景（西から）



1 7区全景（北から）



2 8区全景（西から）



3 9区全景（北から）



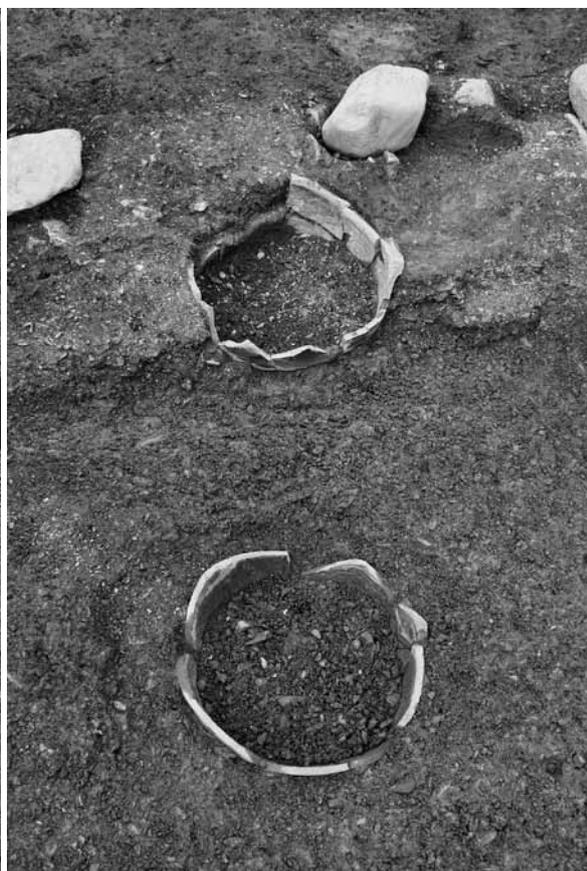
1 10区全景（北から）



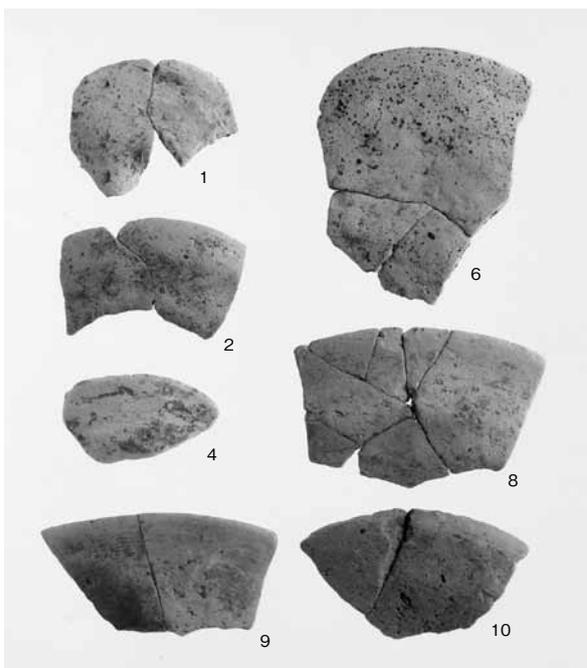
2 建物10（西から）



3 溝47・柱穴列161（北から）



4 土坑70・93（東から）



報 告 書 抄 録

ふりがな	しせき・めいしょう あらしやま							
書名	史跡・名勝 嵐山							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-22							
編著者名	布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき・めいしょう 史跡・名勝 あらしやま 嵐山	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さがてんりゅうじ 嵯峨天龍寺 すすきのばばちよう 芒ノ馬場町 40-8, 9, 13, 15, 30, 47, 49	26100	A809	35度 00分 54秒	135度 40分 37秒	2013年1月 7日～2013 年3月26日	686㎡	商業施設 建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡・名勝 嵐山	史跡・ 名勝	室町時代後期	土坑、柱穴列、石 列、溝、建物、整 地層	土師器、瓦、輸入磁器、 焼締陶器、瓦器				
		江戸時代	土坑、柱穴列、溝、 整地層	土師器、染付、施釉陶 器、土師質土器、石製 品、焼締陶器、瓦類				
		江戸時代末期 ～近代	土坑、路面、溝	染付、施釉陶器、土師 質土器、焼締陶器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-22

史跡・名勝 嵐山

発行日 2013年5月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961